コラム Column

1964 年，1973 年，1993 年，そして 2001 年はこう語った

黒耀石研究センター　山田　昌功

2014 年は，フランスの著名な先史学者 A. ルロワーグーラン（André.Leroi-Gourhan, 1911-1986）の主著，『動作と言葉（Le geste et la parole』1964 年）の発刊 50 周年である．同書は，①技術と言語，②記憶とリズム，の 2 分冊からなる．直立歩行するようになったヒトは，自由になった手で身ぶりと技術を産み出し，それまで担ってきた機能を手に委ねることによって自由になった口をして，言葉（発話）に関与できるようになる．技術と言語は共進化の関係にある．発信者による「線状」的（同時に複数の言葉を発せられない）構造の発話 (signifiant) が，統辞法 (syntaxe) にしたがって文節化（articulation）され，受信者の頭の中の概念 (signifié) と結びつくように，石器技術も，身ぶりを伴う言葉と道具からなる一連の動作の連鎖が「文節化」され，統合されたところの「作業工程」の連鎖（chaîne opératoire）として具現される．直立歩行とは，腕ふりを伴う足の踏み出しであり，舞踏に通じるリズムを胚胎している．また，片手に把持した石を別の手で支えた石にぶつけるという行為は，人工的なリズムを刻むということに通じている．ヒトは四季や天体の運行や歩行距離などの自然のリズムを「馴致」（domestication）する．ヒトの動作には，幼年期に家庭内で形づくられる無意識的・習慣的なものと，学習することによって獲得され，頭のなかでプログラム化されるものとがある．このプログラムには複数のユニットが記録されており，ヒトはそれを「比較対照（confrontation）」することを通じて統合するのであり，このような行為こそ進化の要素である．自動車を運転する現代人が，牛車の製造から始める必要がないのは，プログラムが達成されたものを記録しているからだ．文字などの記録媒体の無い社会では，「生涯を通じて獲得された模倣による訓練・試行による経験，口頭の伝達という三つの角度から」記憶されたものが主役をなす．そのような個人の記憶は，「動作連鎖」がプログラム化された道具を通じて「外化（extériorisation）」され，「集団的な記憶（mémoire collective）」となり，次世代へと継承されていく．ヒトのもうひとつの大きな特徴は，このような聴覚映像とともに視覚映像を発展させたことである．3 万 5 千年前頃，ヒトは薄暗い洞窟の壁面に壮麗な壁画を描いた．それは，「動作連鎖」に音とイメージ（物語り＝神話）が加わり，形而上学的世界の扉が開かれたことを意味する．

日本において同書の翻訳が現れるのは 1973 年（2013 年文庫版として復刻）である．この頃，日本では，石器の接合研究とその領域的復元的研究の世界的な先駆となる可能性を秘めた砂川遺跡の研究が現れた．しかし，残念なことに日本の研究者たちには，『動作と言葉』を参照するという発想は無かった．一方，アングロサクソン社会で『動作と言葉』（「Gesture and Speech」）が翻訳・出版されるのは 1993 年である．30 年という空白が生じたのは，英語版の序文を担当した優れた先史芸術学者である R. ホワイトが赤裸々に吐露しているように，根深い偏見が主な原因であった．彼らにとってグーランは『動作と言葉』の著者である以前に，ラスコー洞窟芸術の解釈によって時代を画した先史芸術研究の大家であった．この分野におけるグーランの研究の結論が「二項対立」的，構造主義的なものであったことから，彼は「型にはまった構造主義者」という烙印を押され，博物館へ押し込まれてしまったのだ，「ポスト構造主義」が時代の寵児であった．

リヒャルト・シュトラウスの「ツァラツゥストラはこう語った」が流れ，宇宙からとらえた地球の背後から太陽が昇るというシーンに，「2001：A Space odyssey(2001 年宇宙の旅)」（1968 年公開）の題名が重なる．場面は夜明け前の東アフリカの大渓谷にかわる．獣骨の散乱する岩場にいるある集団が水辺で眠っている．別の集団が近づく．水場を巡って威嚇しあう両者．劣勢になった水場を追われた集団のなかのものが，骨を弄んでいる．再び「ツァラツゥストラはこう語った」の冒頭，C 音の保持音の上にトランペットによって“自然の動機”が奏される．リズミカルに骨が叩かれる．「直立したサル」（？）が骨を叩き付けた瞬間，パイプオルガンの音が，骨片のように散乱する．骨を武器とした集団が水場を奪回し，雄叫びとともに骨が放り上げられる．場面転換．宙を舞った骨が宇宙空間における宇宙船に転換され，音楽はシュトラウスのワルツに変わる．キューブリック（Kubrick）は，この場面で道具の発生に関するグーランの見解を採用しなかった．また，最初の道具が武器であったという歴史（人間）観は，ルソーよりも「ポストモダンの騎手」に祭り上げられたニーチェに連なると言いたいのだろう．しかし，ここで忘れてならないのは，10 歳で作曲をはじめ，17 歳でシンフォニー「エルマナリヒ」作曲し，優れた歌曲をたくさん残した哲学者ニーチェが，音とイメージとは一致しないこと，言語はメタファー（隠喩）であると主張していることである．「書物や人間や音楽の価値を問うためにまず尋ねるべきはこういう問いかけだ―『それは歩くことができるか？それにもまして踊ることができるか？』だ」．これは，「動作」でも「言葉」でもなく、「動作と言葉」が人類の飛躍の両翼になったことを示唆しているのではなかろうか？

編集後記

本来ならば，1 年前に発行されてしかるべきものが、遅れに遅れ，この時期になってしまい，忸怩たるものがあります．さて，当センターがとりくんでいる「大型研究」（5 年計画）は，中間評価という折り返し地点を過ぎ，現在，ゴールを目指しているところです．当センターが目指している研究とは，長野県長和町というミクロな地点を，いわば垂直的に極めながら，地域や国という枠組みを水平的に乗り越え，マクロ的な共同研究を追求するというものです．特殊なものを普遍的なものに，普遍的なものを特殊なものに読み換えるという作業を積み重ね，「人類誌」の枠組みを構築しようという野心的なものです．『動作と言葉』は，そのような試みの基礎となるような方法的な示唆で溢れた著作ではないかと思います．ご味読ください．　（山田昌功）

明治大学黒耀石研究センターニューズレター　第 3 号
発行日：2014 年 6 月 15 日
編　集：山田　昌功
発　行：明治大学黒耀石研究センター
〒 386-0601
長野県小県郡長和町大門 3670-8
電話　0268-41-8815
URL: http://www.meiji.ac.jp/cols/
印　刷：
〒
※当センターでは施設の固有名称として「黒耀石」の表記を使用しています。

黒耀石研究センターニューズレター

Center for Obsidian and Lithic Studies News Letter

第 3 号
2014 年 6 月

Contents

◆ 巻頭言 -「大型研究」の進捗と成果に立っていっそうの前進 ・・・ 1
◆ 2014 年度スタッフ・組織 ・・・ 2
◆ 2014 年度スケジュール ・・・ 2
◆ 2014 年度『資源環境と人類』第 4 号が刊行されました ・・・ 2
◆ 新刊書の紹介 ・・・ 3
◆ 調査研究活動 ・・・ 3
◆ コラム ・・・ 4
◆ 編集後記 ・・・ 4

巻頭言

「大型研究」の進捗と成果に立っていっそうの展開を

小野　昭（明治大学黒耀石研究センター長）

黒耀石研究センターは，人類 - 資源環境系研究を重点領域研究と定め，考古学，地質学，古環境学を横断する研究プロジェクトとして「ヒト - 資源環境系の歴史的変遷に基づく先史時代人類誌の構築」を推進しています．これは文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 (2011 年度～ 2015 年度) として採択されたプロジェクトです．明治大学ではこのプロジェクトを略して「大型研究」と呼んでいます．

このほかに 2013 に採択された，明治大学研究・知財戦略機構の「国際共同研究プロジェクト」の一環として，ウクライナのキエフ国立大学，国立科学アカデミー考古学研究所と行った共同調査の成果も英語・ロシア語の 2 言語による報告書として刊行しました．加えて，2012 年度に明治大学において開催した石器石材をめぐる国際シンポジウムの成果は，ベルギーのリエージュ大学考古学研究所の ERAUL のシリーズ第 138 号として刊行し，さらに 2011 年に長野県長和町の本センターで開催した国際ワークショップの成果も B.A.R（イギリス考古報告）のインターナショナルシリーズの第 2620 号として，黒曜石の理化学的分析のパイオニアであるイギリスのコリン・レンフルー卿の序文を得て刊行できました．

2014 年 9 月に，当センターでは「若手研究者のための国際ワークショップ」を開催し，次世代の黒曜石研究の担い手の養成と国際的な相互連携の基礎づくりを進めます．ロシア，韓国，中国，ウクライナ，ハンガリー，スロヴァキア，ギリシャ，イタリア，日本の大学院生，若手研究者が参集の予定で現在鋭意準備中です．

こうして「大型研究」を中心に，「国際共同研究」，いくつかの科学研究費に基づく研究を組み合わせて当センターの研究として進めています．先般，文部科学省によって「大型研究」の中間評価が行われ，「フィールドの調査，成果の公表（学術刊行物・対社会発信）も充分進捗し，極めて高いレベルの研究がおこなわれている」と高い評価を得ました．

これに満足することなく，このプロジェクトに残されたあと 1 年半の間に，特に「人類誌の」構築という高い課題にチャレンジし，実現を目指す必要があります．これには広く言えば自然環境と人類活動の相互関係のいっそう具体的な解明だけでなく，関係統合の仕組みの構築が必要です．プロジェクトが開始されてから若干の論文，研究ノートはありますが，もちろん充分ではありません．

3 年間発掘調査した長野県小県郡長和町にある広原湿原の調査と，湿原周辺の旧石器時代・縄文時代遺跡群の調査の成果を相互にどのように統合してこの課題に接近できるかが鍵になります．「大型研究」の進捗と成果に立って「ヒト - 資源環境系の歴史的変遷に基づく先史時代人類誌の構築」をさらに一歩前に進める努力をしたいと思います

２０１４年度のスタッフ，組織

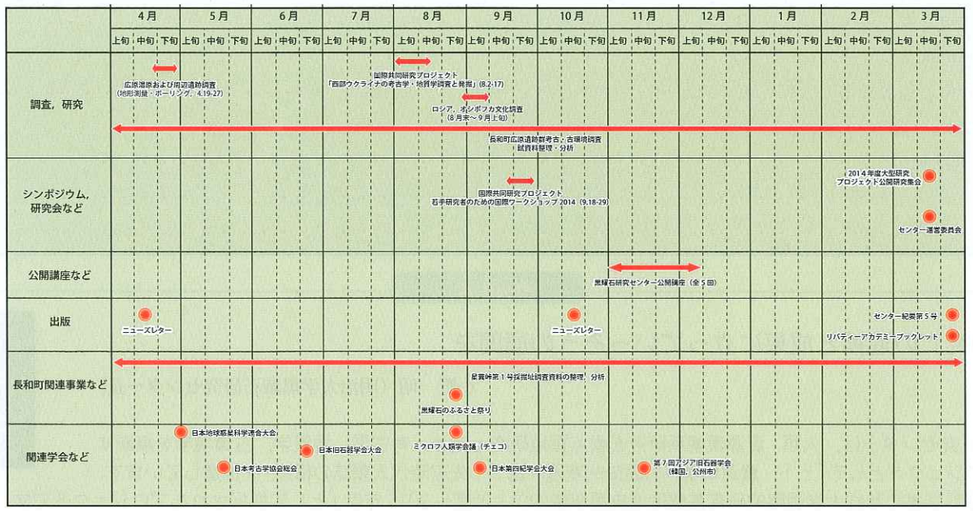
・**センター長**：小野　昭（明治大学研究・知財戦略機構）
・**副センター長**：阿部芳郎（明治大学文学部）

■ センター員（50 音順）
・池谷信之（沼津市教育委員会）
・及川　穣（島根大学法文学部）
・島田和高（明治大学博物館）
・隅田祥光（長崎大学教育学部）
・須藤隆司（佐久市教育委員会社会教育部文化財課）
・諏訪間　順（小田原市観光課）
・大工原　豊（國學院大學・青山学院大学）
・堤　　隆（浅間縄文ミュージアム）
・橋詰　潤（明治大学研究・知財戦略機構）
・藤山龍造（明治大学文学部）
・山田昌功（明治大学研究・知財戦略機構）
・吉田英嗣（明治大学文学部）
・吉田明弘（明治大学研究・知財戦略機構）

■ 運営委員会
・小野　昭 委員長
・阿部芳郎 副委員長
・大竹憲昭 委員（長野県埋蔵文化財センター）
・藤野次史 委員（広島大学総合博物館）
・矢島國雄 委員（明治大学文学部）
・髙山茂樹 委員（明治大学研究推進部）

■事務担当
・島田理保（明治大学研究知財事務室）
・河野秀美（明治大学研究知財事務室）

2014 度スケジュール



紀要『資源環境と人類』第 4 号が刊行されました

■論　文
・中村雄紀・金成太郎「追平 B 遺跡出土石器群の再検討ー愛鷹山麓における後期旧石器時代初頭の石器石材利用ー」　2
・隅田祥光・山田昌功・S. リゾフ・V. ステパンチューク「ウクライナ，トランスカルパチア地方における黒曜石の記載岩石学的特徴」（英文）　21
・須藤隆司「削片系両面調整石器ー男女倉・東内野型有樋尖頭器の再構築ー」　39

■ 総説
・山田昌功「前期更新世における黒曜石」　57

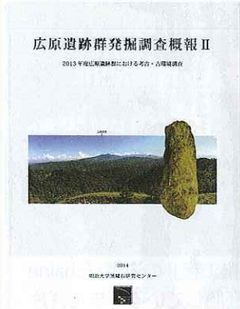
■資料報告
・堤　隆・望月明彦「中ッ原遺跡群第 5 地点および第 1 遺跡 G 地点における削片系細石刃群の原産地推定」　73
・及川穣・宮坂清・隅田祥光・堀恭介・今田賢治・川井優也・河内俊介・角原寛俊・藤川翔「長野県下諏訪町和田峠西黒曜石原産地の調査報告」　83
・金成太郎「黒曜石製遺物の原産地推定結果（2010~2013 年度未公開分）」　99

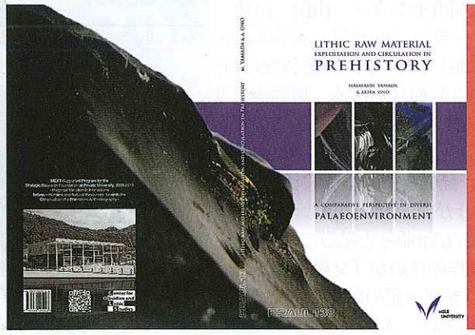
■書評
小野　昭「完新世チロル地方の人類と環境，第 1 巻，D. シェーファー編『中石器時代プロジェクトーウラーフェルゼン』（第 1 部），A4 判 560 頁，フィリップ・フォン・ツァーベルン書店，インスブルック，2011 年刊」

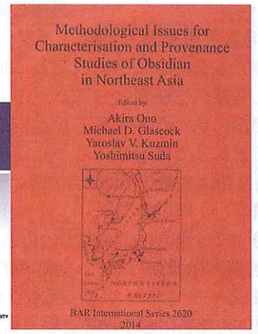
■黒耀石研究センター活動報告 2013

『資源環境と人類』
第 4 号

新しい出版物の紹介







1　2　3　4

1.『広原遺跡群発掘調査概報 II ー 2013 年度広原遺跡群における考古・古環境調査』, 2014, 22 頁 , 黒曜石研究センター
2. M.Yamada and A.Ono (eds) : Lithic raw material exploitation and circulation in prehistory ; A comparative perspective in diverse Paleoenvironments, ERAUL 138, 2014, Liège, Belgium. 236 p.
3. A.Ono, M.D.Glascock, Y.V.Kuzmin, and Y.Suda (eds) : Methodological Issues for Characterisation and Provenance Studies of Obsidian in Northeast Asia, BAR International Series 2620, 2014, Oxford. England
4. M.Yamada (ed) : International joint research project, report 2013; Archaeological and Geological Researchs in Ukraine. М. Ямада (Редактор): Международный научно-исследовательский проект сотрудничества.

調査研究活動

2013 年 8 月 19 日から 8 月 26 日まで，ルーマニアのヤシ市にあるアレクサンダー・クーザ大学において，"Archeoinvest Symposium, International Symposium on Chert and Other Knapable Materials" というタイトルで国際シンポジウムが開催されました。当センターは，"Obsidian: methodological issues of obsidian provenance studies and a new perspective of archaeological obsidian" のセクションを組織しました。

2013 年 9 月 23 日から 9 月 29 日にかけて、隠岐島後北部，南部，西部地域における黒曜石原産地調査が行われました．この調査結果，23 地点の黒曜石の第一次産地が推定されました。後期中新世重栖層相当の流紋岩・粗面岩火砕岩が，黒曜石産出の鍵層として把握されました．

2014 年 1 月 11 日から 1 月 19 日まで地中海のほぼ中央に位置するイタリアのサルディニア島の黒曜石原産地の踏査が行われました．地中海沿岸の諸地方の先史時時代人は、新石器時代になると石器石材として黒曜石を利用・活用するようになりました．この地方における黒曜石の主要原産地のひとつであるサルディニア島は，地中海地方の黒曜石の交易の結節点として機能しました．島中部の東側に位置するアルチ山（写真左）と搬出ルート（写真右）

2013 年 8 月，西部ウクライナの前期・中期更新世の遺跡の調査が行われました．トランスカルパチア地方は，中期旧石器時代から黒曜石が石器石材として開発されてきた，世界的にみても希有な地域です．今回の調査では，ラコソヴォ村の近辺で新しい黒曜石の露頭箇所が発見されました．ウクライナ国立キエフ大学と国立考古学研究所との緊密な協力関係に基づき，遺跡の発掘のみならず，遺跡立地と第一次産地との関係とその歴史的な発展のメカニズムについての研究が待たれます．